

京都大、大阪大、関西学院大による「高大接続フォーラム」開催！

高校教育改革、大学教育改革、入試改革、 高大接続の現状と今後の動向とは

2015年1月、文部科学省の「高大接続改革実行プラン」が公表され、高校教育・大学教育・大学入学者選抜の一体改革の方向性が示された。それを受けて、同年6月、大阪において、スーパーグローバル大学の指定校でもある3大学、京都大、大阪大、関西学院大による「高大接続フォーラム」が開催され、高大接続改革の現状と展望、各大学の高大接続・入試改革の取り組みが語られた。

第1部 文部科学省による基調講演

高大接続改革の背景と展望

フォーラムの第1部では、文部科学省の伯井美徳大臣官房審議官による基調講演、第2部では、京都大・大阪大・関西学院大それぞれの取り組み、ベネッセコーポレーションによる大学入試における英語の外部検

定試験の活用に関する報告が行われた。当日はあいにくの雨だったが、会場は高校教師を中心とする約500人の参加者で埋め尽くされた。



基調講演のテーマは、高大接続改革の背景、高大接続改革実行プランの内容と検討状況、高校教育改革だ。

グローバル化や生産年齢人口の減少が進む中、イノベーション人材の育成が急務であり、そのためには、知識量の拡大に主眼を置いたこれまでの教育から、思考力・判断力・表現力や主体性を持って多様な人々と協働する態度などの「真の学ぶ力」の育成を重視する教育に転換しなければならぬ。「知識伝達型の高校教

育を刷新し、大学入試も多様な能力・

経験を評価する選抜へ転換を図り、大学教育との三位一体の改革を目指すのが実行プランの趣旨」と、伯井審議官は語った。

中でも、高校現場への影響が大きい事案は、センター試験に代わる新テストの導入、及び英語の4技能を総合的に育成・評価する英語教育の改革だ。後者については、民間の資格検定を入試の合否判定材料として活用する道が示された。高校教育改革



文部科学省
大臣官房審議官
高大接続・初等中等教育局担当
伯井美徳
はくい・よしのり

については、学習指導要領を抜本的に見直し、アクティブ・ラーニングの充実を図る他、選挙権年齢等が満18歳以上となることを踏まえた社会参画意識を高める科目の設置、地理歴史科の見直し、課題解決型学習の充実などが挙げられた。また、「大学入学者希望者学力評価テスト(仮称)」が2020年度をめどに実施予定である点や、22年度に学習指導要領が改訂されることが改めて確認された。

大学入試は「マッチングの場」

京都大は、北野正雄教育担当理事・副学長が高大連携の取り組み、16年度から始まる特色入試の概要を報告した。「本学は、入試を選抜ではなく、『マッチングのプロセス』と位置付けている。大学が高校生の適性や興味・関心を捉えると同時に、高校生が自身の能力や才能を発揮する機会を与えることが大切」と北野副学長は説く。

マッチングの機会として、京都大は高大連携を重視。既に13都府県市の教育委員会と連携している。15年8月には模擬授業や大学生との交流を中心としたサマースクールを行い、同11月には各都府県市の代表12校の高校生が研究発表を行うサイエンスフェスティバルを実施予定だ。高校生の学びを支援しつつ、京都大の教育や校風を周知してマッチングを図る。



京都大
教育担当理事・
副学長
北野正雄
きたの・まさお

図1 京都大 特色入試の概要

高大接続と個々の学部への教育を受ける基礎学力を重視し、次の①と②の判定を併せて、総合的に評価して選抜する。

①高校での学修における行動と成果の判定

高校在学中の顕著な活動歴（*1）を記す学業活動報告書や推薦書、学びの設計書で評価する

②個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定

センター試験の成績、学部ごとの能力測定考査、論文試験、面接試験、口頭試問などを組み合わせて実施する

*1 数学オリンピックや国際科学オリンピック出場、各種大会における入賞、教育委員会賞、国際バカロレアディプロマコース、SAT、英語外部検定試験の成績など

* 京都大の資料を基に編集部で作成

それを更に推し進めた改革が、16年度に始まる「特色入試」だ。各学部のアドミッション・ポリシー（AP）に応じて、推薦・AO入試、後期日程など、様々な方式で選抜する。入学定員は全学部計100人程度。入学定員の3%だが、北野副学長は「これはあくまで出発点」と今後の拡大を示唆する。最大の特徴は高大接続を意識した点で、出願時には高校時代の活動を記す「学業活動報告書（学びの報告書）」と、志望理由や大学での目標を記載する「学びの設計書」を提出。それらとセンター試験、

キーワードは「世界適塾」

大阪大は、東島清^{ひがしじま}教育担当理事・副学長が「育てたい人、受け入れた人」をテーマに高大接続の現状と展望を語った。同大学はAPに「確かな基礎学力」「主体的に学ぶ態度」「自ら課題を発見し、探究する意欲」を掲げる。「大学教育は『教わる』から『自ら学ぶ』への転換が必要で、能動的な学習態度を持つ人にとって、大学は宝の山になる」と東島副学長は断言する。大阪大の改革を象徴するキーワードは「世界適塾」だ。同大



大阪大
教育担当理事・
副学長
東島清
ひがしじま・きよし

総合問題、口頭試問、論文試験など、個別試験の成績を総合して可否を判定する（図1）。京都大では、全学のAPに「対話を根幹とした自学自習」を掲げる。特色入試もそうした主体性を重視する選抜内容にしている。

学は江戸時代後期、緒方洪庵が開いた適塾を原点とする。幕末には日本中から俊英が集ったが、21世紀の大阪大は世界中から優れた学生や研究者が集い「調和ある多様性」を創造するグローバル大学を目指すという。その達成に向け、様々な分野で教育の国際化を加速させる。英語で行う授業の増加、国外からの遠隔講義の充実、海外派遣への支援などを行うのと同時に、17年度にはクォーター制を導入。春・秋・冬学期に通常の授業を行い、6月下旬〜8月を夏期講習期間として海外留学を促進する。

現在実施する独自入試に代えて、17年度、定員の約10%を対象に、高校生の多様な能力や実績、意欲を評

図2 大阪大 独自入試制度 概要

- **挑戦枠（一般入試前期課程）／理学部：37人** 知識の習得だけでなく、自分の頭脳で粘り強く考察する人を選抜
- **研究奨励AO入試／理学部：16人** 高校で優れた研究活動をした人を選抜
- **推薦入試／基礎工学部：40人** 科学技術を担う意欲と適性を評価
- **国際科学オリンピックAO入試／理・工・基礎工学部** 国際科学オリンピック日本代表者から選抜
- **世界適塾AO入試、世界適塾推薦入試、国際オリンピックAO入試（2017年度～）** 定員の10%をめどに、高校で主体的に学ぶ態度と能力を身に付けた意欲ある人材を選抜

*大阪大の資料を基に編集部で作成

価する「世界適塾入試」を導入予定。高校時代の成績やセンター試験の他、GTEC CBTなどの英語外部検定試験のスコア、SSHの研究発表会出場者、SGHコースの履修者など、高校時代の多様な活動を総合的に評価する（図2）。

高校生の多様な力を育むため、高大接続も強化する。科学技術振興機構のグローバルサイエンスキャンパスの指定を受け、高校生対象の理数教育も実施していく。

第2部 関西学院大 改革の現状報告

高大接続で課題研究をサポート

関西学院大は、19世紀末の宣教師W・R・ランバスによる創立時から「世界市民の育成」を大学のミッションとして掲げてきたグローバル大学である。ミッションの実現のために、国際ユースボランティア、ダブルディグリー留学、海外フィールドワークなど、数多くの国際教育プログラムを展開してきた。

小菅正伸理事・副学長から、大学の歴史、国際化の取り組みが説明された後、高大接続センターの尾木義久次長が高大連携・入試改革の現状を報告した。高大連携という点、従



関西学院大
高大接続センター
次長
尾木義久
おぎ・よしひさ



関西学院大
理事・副学長
小菅正伸
こすが・まさのぶ

来、大学・学部理解のための出前授業など、キャリア教育としての側面が強かった。同大学では、SGHや課題研究に取り組む高校生、それを支援する高校教師のために、専門的な知識・技能の提供を主眼に置く。高校生による公開討論会、国連機関の職員を招いてのワークショップなどの意欲や志を醸成する取り組みから、英語の4技能をバランスよく伸ばすための高校教師向けセミナーまで、多様な形で高校の課題研究活動や語学教育を支援している。

入試改革も、文部科学省の高大接続改革に先行して力を入れてきた。14年度には、学生の能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価する「グローバル入試」を導入。16年度からは、SGH・SSH校生を対象とする公募推薦入試、4技能型の英語検定試験のスコアを出願資格とする入試制度を導入予定だ（図3）。

「大学入学者希望者学力評価テスト（仮称）」は活用の方で準備を進め

ており、19年度実施予定の「高等学
校基礎学力テスト（仮称）」について
も推薦入試などでの活用を検討中だ。
「政府が進めているからということでは
なく、これからの社会に必要な力を
いかに子どもたちに身に付けさせ
るかという視点が、教育者に求めら
れている」と、尾木次長は強調した。

図3 関西学院大 高大接続改革実行プランに対応した入試 概要

- **グローバル入試（2014年度～）** GTEC for STUDENTS、GTEC CBTなどのスコアや、模擬国連活動に取り組んだ経験、留学経験や海外経験を有する者（帰国生徒含む）、国際バカロレア認定者、科学オリンピックに挑戦した者などを対象とし、5つのカテゴリーで実施
- **4技能型の英語検定試験と大学入試センター試験を活用する入試（2016年度～）** GTEC CBT、TOEFLなどのスコアを出願資格に設定。レベルはCEFR・B2レベル程度
- **4技能型の英語検定試験のスコアと推薦入学の出願資格（2016年度から漸次実施）** GTEC CBT、TOEFLなどのスコアを有する者が望ましい。レベルはCEFR・B1レベル程度
- **SGH校対象公募推薦入試、SSH校対象公募推薦入試、教育連携校対象公募推薦入試（2016年度～）** 課題研究論文や学びの計画書による第1次審査、個別面接・グループディスカッション・プレゼンテーションなどによる2次審査で評価。GTEC CBT、TOEFLなどのスコアについても評価の対象

*関西学院大の資料を基に編集部で作成

入試での英語外部検定試験の活用法を解説

ベネッセコーポレーションの山田高幹からは、今後の大学入試において、留学経験や高校での多様な活動歴による多面的・総合的な評価、及び英語の4技能の評価が一層重視される見通しが解説された。

4技能型の英語外部検定試験の入試での活用法には、次の5点が示された。

- ① 出願基準（基準スコアを満たす者のみ出願可）
- ② 書類審査（可否判定に利用）
- ③ 試験の代替（英語本試験に代えてスコアを得点化）
- ④ みなし得点化（スコアに応じてみなし得点を設定し、英語本試験の得点より高い場合に代替）
- ⑤ ベースアップ（スコアに応じて英語本試験に得点加算）

15年度入試では、センター試験の英語で思うように得点できなかった受験生が、GTECのスコアが志望大の基準に達していたために合格した事例が報告された。外部検定試験

のスコアを持っていることが進路実現に有効だった一例といえる。

英語の外部検定試験を活用する入試の受験対象者数は、15年度入試まで3000人程度だったが、16年度以降は7万人に上り、更に拡大する見込みだ。外部検定試験が重視される背景には、高校生の英語力の課題がある。日本の高校生の90%以上が、CEFR（ヨーロッパ全体で外国語の学習者の習得レベルを示す基準）のA2レベルにとどまると見られており、B1以上は10%に満たない。

高大接続改革の議論では、日本人の英語力の現状を踏まえたテスト開発のあり方が論点に上がっており、高校生の学力レベルに適した外部検定試験の選択が今後、一層重要になると考えられる。



ベネッセコーポレーション
山田高幹
やまだ・たかもと

新テストや、主体性等を入試でどう測るかに関心が

質疑応答では、会場から多くの質問が寄せられた。

中でも関心が高かったのは、新テストの活用だ。「『高等学校基礎学力テスト（仮称）』を入試に使う場合、どのように活用するのか」という質問に対して、京都大の北野副学長は、「テストの活用は改革会議の議論の内容を見ながら総合的に判断していく。高校現場に、入試で必要のない科目は履修しない傾向があるのは事実。幅広い学力が担保されるなら、何らかの形で入試に活用することはあり得る」と答えた。大阪大の東島副学長は、「本テストは高校における学習の達成度を測る試験なので、入試とは目的が異なる」という認識を示しながらも、「大学としては調査書に書いてほしいという思いはある」と答えた。関西学院大の小菅副学長は、「調査書を補完する情報として活用する方向で検討中」と述べた。

各大学の報告の中で強調されていた高校生の主体性や意欲について、

入試ではどのように評価されるのかにも、関心が集まった。「高校生の主体性を大学入試でどのように測っていくのか」という質問に対して、東島副学長は、「高校生を身近で見えてきた学校の先生の目が、最も信頼できると考えられる。高校からの提出書類を採用すると共に、高校生本人が作成する活動報告の内容から、我々自身が受験生の資質を見極めていく必要がある」と述べ、高校生の活動報告を読み説く力を持つ教職員を育成する意向を語った。

今回のフォーラムで明らかになったのは、高大接続改革に対する高校現場の関心の高さだ。会場は高校関係者で埋まり、質疑応答では前述の他にも、新テストや入試方式について多くの質問が寄せられた。

高大接続改革の細部はいまだに見えない部分も多いが、引き続き文部科学省や各大学から発信される情報を注視していきたい。